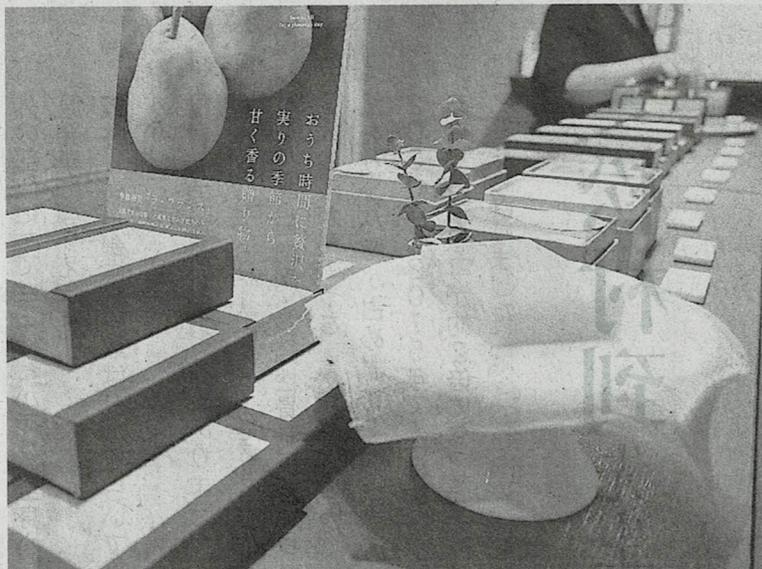


泡立ちしっとり 日曜日のご褒美



②色とりどりの手作りせっけんが並ぶ「Sunday Savon」の店内＝神戸市中央区
③出荷前のせっけんを並べる田中さん＝芦屋市

全てひとりで手作り。これ欲しさに全国から客が集まる。そんな洗顔せっけんを10年以上、販売し続けている「町のせっけん屋」が神戸市にある。デパートなどで売られる大量生産の化粧品が主流の中、目指すのは毎日でも飽きない「町のパン屋さん」のような存在だという。



神戸「町のせっけん屋」田中さん

中央区栄町通1丁目の建物の2階にある「Sunday Savon (サンデーサボン)」。3畳ほどの空間に色とりどりの箱に入ったせっけんが並ぶ。その店名の通り、店が開くのは毎週日曜日だけだ。

「届けたい品質のせっけんを販売するためには、この方法しかありませんでした」

開発から製造まで1人でこなす田中光城さん(57)は言う。

看板商品である「水入りせっけん」の試作を始めたのは2012年。

それまで約20年間は、生活用品大手のP&Gで商品の研究開発に携わった。中でもファンデーションの開発が専門だった。

さまざまな原料を組み合わせ、無限にあるパターンの中から商品として売り出せる「黄金の配合」を探し出す。化粧品開発の最先端でその面白さにのめりこんだ。

だが、「これは」と自

化粧品研究職20年 質にこだわり手作り

信をもって商品化したい化粧品を提案しても、世に出ないこともあった。

コストが高くて、量を増やすとうまく混ざらないなど、工場での大量生産には向かなかつたためだ。質が良くて世に出るまで、1日だけになった。

「作り手としては不満足だった」。

化粧品開発者の多くが複数のメーカーを転々としてキャリアを積むのが一般的な中、退職して独立する道を選んだ。「化粧品処方家」という肩書も自分でつけた。

20年のキャリアで様々な化粧品を作れるようになったという田中さんが起業の柱に選んだもの。それが、紀元前から人間の肌を支えてきた、せっけんだった。

汚れはしっかりと落とすでも、落としすぎてつっぱらないように。一般的なものは違っていて製造の過程で乾燥させず、水を飛ばさないのが特徴だ。

ふわっと立ち上がる精油の香り。つっぱりが少なくしっとりとした洗い上がり……。1年かけて、保湿力が高く香りの

強いせっけんができた。そして13年に店をオープンした。

全てひとりで作業をするため、毎日販売するには生産が追いつかない。必然的に、営業は週1日だけになった。

40坪のトライアルサイズは一つ990円。顔だけでなく身体にも使える。

「ずっと使ってくれるお客さんがいるから」と10年以上レシピを変えていないという。オンラインの一般販売もしているため、全国から客が訪れる。

田中さんの理想は、同じように製造から販売までを手がける「マイスターコスメ」の店が増えること。

「化粧品は他人が『良い』と言ったものが必ずしも自分にとっても『良い』わけではない。高品質なものをしっかりと試せて、自分に合う化粧品を見つけれることが大事だと思えます」

神戸の栄町通・海岸通りエリアをそんな場所にす

るのが、今の夢だ。

(宮坂泰津)